

十字架称賛（年間第24週）

（一）聖書朗読：ヨハネ福音3：13 - 17

モーセが荒れ野で蛇を挙げたように、天から降ってきた者は、人の子も挙げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。神は、その独りの子をお与えになったほどに、世を愛された。遣わされた御子は世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

（二）カテキズムの響き：（『カトリック教会のカテキズム』の番号#440、442、444 - 445、449、679、1850；YOUCAT # 101-102、111）

罪を犯したイスラエルの人々は青銅の蛇を仰ぐと、命を得ました（民数記 21:4-20）。今でも、罪は神を無視するほどの自己愛なのです。この高慢ゆえに、罪は救いをもたらされたイエスの従順とは、まったく正反対のものなのです。そのために、天から降って来た人の子の超越的な身分は、メシアとして王権の本来の意味を明らかにします。これは、人の子が仕えられるためではなく、仕えるために、多くの人に贖い使命をもって命をささげるためです。殺したイエスが十字架につけられて、復活後にはじめて、メシアとしての王権がペトロによって神の民の前で宣言されました。ペトロがイエスをメシア、生ける神の子キリストと公言したように、イエスのご自分を神の独り子と呼び、この称号によって、ご自分の永遠からの存在を断言しておられます。イエスの死と復活の神秘を前にして初めて、信仰者は神の子の称号の究極の意味を把握することができます。だから、使徒たちは、「私たちはその栄光を見た。それは父の一人子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」と公言することができたのです。

というのも、イエスは神の身分であり、御父がイエスを死者の中から復活させ、栄光のうちに高く上げることによって、イエスの主権を明らかにされたからです。キリストは永遠の命の主であり、人間の行為と心とを最終的に裁く至上権は、世の贖い主であるキリストに属します。キリストはこの権利を十字架によって、勝ち取られました。しかも、御父は裁きは一切子に任せておられるのです。ところで、御子は裁くためにではなく、救うため、ご自分のうちにある命を与えるために来られました。子の命の恵みを拒絶することで、各々はすでに自分自身を裁き、その行いに従って報いを受けています。

（三）カテキズムの学び（『コンペンディウム』カトリック・カテキズム要約の番号）

82-83 キリストの名について：

—ギリシア語「キリスト」：神から世にお遣わしになったメシア（ヘブライ語で）です。

—十字架につけられ、そして復活した苦しむしもべ：

天から降ってきて（ヨハネ 3:13）、多くの人への贖いのために命ささげます。

—神の独り子：三位一体の第二ペルソナであり、その父である神との比類ない永遠の関係を断言しておられます。

最後の祈り：共同祈願の後、主日の集会祈願をもって、祈りを終えます。